

第27回 3D教育研究会 開催レポート

ご挨拶

日頃より、株式会社 KA 教育の教育活動にご協力を頂き誠にありがとうございます。

この度『第27回 3D教育研究会』を開催することが出来ました。

『新教育課程で求められる資質・能力の育成』と題し、東京大学名誉教授の市川伸一先生による講演が行われました。開催時のレポートを作成致しましたので是非とも周囲の先生方へご回覧頂ければ幸いです。

21世紀を担う生徒達にとって、『3D教育プログラム』が、少しでもお役に立てればと願う次第でございます。

今後ともよろしくお願い申し上げます。

令和3年12月吉日
株式会社 KA 教育
代表取締役 菊地 淳

第1部「講演会」

会長挨拶

3D教育研究会 会長 片倉 敦先生(順天中学校・高等学校 副校長)



皆さまこんにちは。本日は会場を貸していただき、ありがとうございました。また市川先生にはお忙しい中、お越しいただきありがとうございました。

本日の講演はいろんな先生方に聞いていただきたいと常々思っていました。今回、学習指導要領が改定になりました。今回はものすごく大きな改定で、21世紀を生きる子どもたちがどういう力をつけないといけないのかということを文部省は真剣に考えました。文部省だけではなく、全世界、OECD諸国全てがどういうふうにしたらいかが真剣に考えています。全世界が同じ方向を向いている感じがします。大きな改定は何かというと、資質・能力ベースになったということです。中学校は今年から変わりました。学習指導要領が普通なら1年生から変わるのですが、3年生も評価基準が変わりました。そういう中で先生方が右往左往していて、その前の周知があまりなく、こういう研修をする必要があり、意義があると私は考えています。例えば私たちは知識・技能ベースだと経験があるのですが、思考力・判断力・表現力、この辺まではまだ先生方も許せるよとおっしゃるのですが、次の学びに向かう力とか人間性の評価はどうやってするのか。その目に見えないパフォーマンス評価をどうやっていくのかということがこれからの学校に求められています。その評価についても周知がありません。中学校も調査書が、各高校に次の入試には評価がついてくるのです。思考力・判断力・表現力すべてにAがついているのに4。そういうことがあってこの後の研修がされないと、日本の教育の評価体系そのもの、これからの学習の向かい方が心配です。今までのコンテンツベースがコンピテンシー・ベースにどうやって変わっていくか。これから生きるために必要な資質・能力をどうやって身につけていくのか。そのためにはどういう授業が必要か。市川先生にはそういうことを含めた話をお聞きしたいと思っています。よろしくお願いします。

ご挨拶に代えさせていただきます。ありがとうございました。

講演

「新教育課程で求められる資質・能力の育成」

中央教育審議会教育課程部会委員 東京大学名誉教授 帝京大学中学校・高等学校校長補佐
市川 伸一先生



ただいまご紹介に与かりました市川と申します。今日はよろしくお願いいたします。お話が2部に分かれておりまして、第1部は最近の指導要録の変化。第2部は、ではどんな授業になるのかをビデオでご覧いただこうと思います。

新教育課程で求められる資質・能力の育成 —授業と評価はどう変わるのか—

来年から高校も3観点での観点別評価が入ってくるということなので、今年度になってから公立も含めて、評価の話をしてほしいという依頼が非常に多いのです。私も学習評価のワーキンググループの分科会の主査をやっていたので立场上説明をする責任があると思っています。授業の準備や教材研究に時間を割きたい中で、高校の先生が評価を律儀に受け止めて、やっているわけにはいかないというのは私も十分承知しています。評価の専門科の方はきちっと評価を作ろうとします。私は近いところにはいますが評価の専門科ではないので、これくらいで十分であろうという話を私からはしたいと思います。

自己紹介

私は大学に入ったときは理系で、天文学に進みたいと思っていました。その夢は破れて、天文学には進めませんでした。心理学の道に進みました。文学部の中の実験心理学です。実験心理学は文学部ですが、理系に近いことをやります。心理学的な実験や調査をやり、それを統計的に解析します。理系から行ったので順応できたかなと思います。その後、教育に興味を持つようになり、教育心理学と言われる分野に進みました。東京工業大学で教職課程の教員を務めていたこともありまして、東京工業大学で教育学の講義をしていました。その次に東京大学の教育心理学のコースで約25年務めました。約2年半前に定年になり、できれば現場に近いところで仕事がしたいと思いました。たまたま知り合いが紹介してくれたのが、帝京大学中学校・高等学校でした。そこで教員研修をやったり、生徒向けの授業も時々やります。校長補佐という役をいただきまして、2年半経

ったところですよ。

学力の3要素

今回の学習指導要領の改訂の少し遡った話をしたいと思います。そんなに急に出て来たものではありません。2002～2008年に学力の3要素が言われるようになりました。前回の学習指導要領の改訂期に起こったことです。1990年代から生きる力ということが言われました。ペーパーテスト学力ではなく生きる力を育てる、生きる力とは何か？知・徳・体ですが、そのうちの一つが確かな学力。豊かな心、健やかな体。こういったものをトータルにバランスよく育てていこうというものです。「確かな学力」とは何か？生きる力の一つの側面です。2003年の答申でこのように出ています。知識・技能。問題発見、主体的な判断・行動、よりよく解決。学習意欲。こういうことが「確かな学力」の中身である。それを基に2006、2007年に教育基本法、学校教育法が改正されます。学校教育法の中で学力の3要素にあたるものが、基礎的な知識・技能。思考力・判断力・表現力等。主体的に学習に取り組む態度。こういうものを育てていくのが学校教育の役割だと。

なぜ、3要素か？

1990年代に日本の教育はゆとり教育にシフトしていきました。1998年にゆとりの集大成の指導要領ができました。ところがその直後に学力低下になり、ゆとり教育などと言ってる場合ではない、日本の子どもたちは昔に比べてはるかに勉強しなくなっているし、学習意欲も学力も落ちています。文科省も最初はそんなことはないと言っていたのですが、そうではないというエビデンスも出て来てなんとかしなければいけない、と学力向上にシフトしようということになっていきました。大学や社会でも必要になる能力の基本とは何なのだろうか。どういう力を求めるかという、このような3つが挙がってきます。まず着実な知識を持っているか。思考力、コミュニケーション力、創造性。学習意欲や学習スキル、能動的な参加態度。この3つから評価することが多いと思います。学力向上とは言っても、過去の「知識偏重」や「偏差値教育」に戻すわけではないと文科省は言いたかった。当時のコンセプト（人間力、社会人基礎力、学士力、キーコンピテンシーなど）とも方向性が合致して行き、この3要素ということになりました。



新学習指導要領

1998年がゆとりの集大成、いろんな議論があり、教育基本法、学校教育法が改正され、2008年の前回の改正です。その流れを今回も引き継いでいると思っていただいた方がいいと思います。前回も出て来た、生きる力。習得・活用・探求。教授と活動のバランス、より強調・拡張するためのキーワードです。学校と社会が連携しながらカリキュラムに参加するという意味が含まれています。それぞれの教科がどういう資質能力を育てるのかを話し合ってやってほしいと思います。アクティブ・ラーニングが今回の改訂の目玉と言われましたが、その意味するところが曖昧なので、アクティブ・ラーニングを主体的・対話的で深い学びに変えました。カリキュラム・マネジメントですが、各教科ではやっているが、教科横断的に例えばコミュニケーション能力

なら、それぞれの教科が自分の教科のどういう単元に活動を入れてコミュニケーション能力を育てていくのか。トータルとして、どういうコミュニケーション能力が育つようにするのか考えているかという、ないと思います。小学校の先生なら、一人でいろんな教科を担当しているので可能ですが、中学・高校になると別の教科の先生が集まって教科横断的に話をするとっても難しい。PDCAサイクル、計画を立てて実際に実行して、それが上手くいっているかチェックして、改善のアクションに結びつける。こういうことも教育の中で考えていってくださいというのも分かるのですが、それを学校全体でやるというのは難しい。そのためにはリソースの配分を考えてください。リソースの配分は人、物、金などの配分を考えてください。人というのは学校の先生だけではなく、地域の方、保護者の方、いろんな方と連携しながら、どこにどういう人を配分するか考えてください。物というのは施設や設備。お金というのは予算です。これらの配分を考えて、うまくそれが効果的に進んでいるかPDCAサイクルで対処していく。これは相当難しいことを要求していると私は思います。高い理想だと思うので、20～30年かけてやっていくというくらいの趣旨でいいのではないかと、今回の改訂を機会に実現していく入り口に立ったというくらいでもいいのではないかと思います。

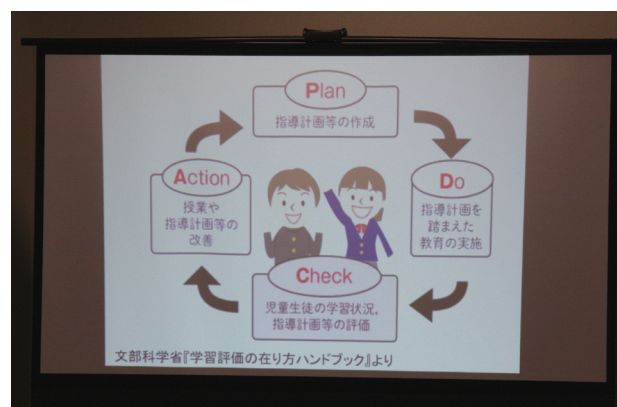
資質・能力の3つの柱

学力の3要素をほぼ踏襲しています。生きて働く「知識・技能」の習得。思考力、判断力、表現力等。学びに向かう力、人間性等。これが今回の指導要領の柱と呼ばれているものです。それを踏まえて評価はどうなるかという話になります。学習評価の目的は何かという根本的な議論をしました。評価をフィードバックすることによって学習改善のための情報を提供するというのが評価の一つの役割である。もう一つは評価することによって教師自身が自分の授業を改善していく。指導の改善に活かす。この二つが学習評価の目的です。これまでやってきたことの大胆な見直しもありました。小中では4観点別評価をやっていました。その4観点を簡素化して3観点にしましょう。これを学力の3つの柱に対応したものにしたい。今回、小中だけではなく高校でもやってください。高校の先生は場合によっては一人で200人見えています。丁寧に評価するのは不可能と、高校から反対が出ると思っていました。ところがほとんど反対がありませんでした。私は座長としてはほっとしました。教科ごとの評定については揉めました。ABCの3観点で評価がついているのだから、総合的な1～5の評価は研究者側はもういらぬのではないかと、つけたい学校はつけばよいと考えていました。これに学校が強く反対し、小中高は評定は必要と考えていて、存続しました。そして「主体的に取り組む態度」をどう評価するのか。評価によってPDCAを回すようにしてください。

Plan...指導計画等の作成。Do...指導計画を踏まえた教育の実施。Check...児童生徒の学習状況、指導計画等の評価。Action...授業や指導計画等の改善。

観点別評価:知識・技能

評価の3観点とどう風に対応していくのか表しています。知識・技能は知識・技能と対応しています。思考力・判断力・表現力等は思考・判断・表現と対応しています。学びに向かう力、人間性というのは感性、思いやりはABCで評価するのは馴染まないで、個人内評価で記述による評価にすればよいでしょう。学びに向



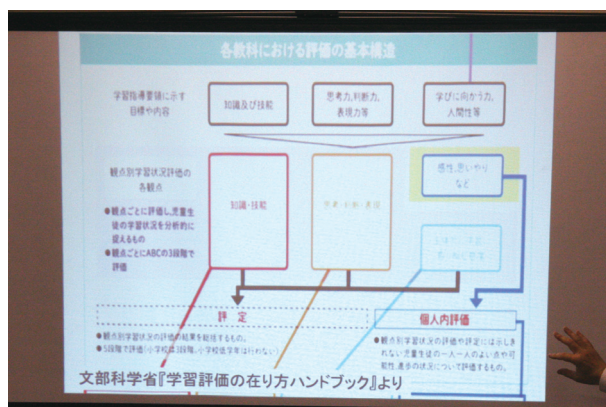
かう力の評価は学習に取り組む態度として評価していきますと言うことになりました。評価の対象は基本的知識・技能がどれだけ身についているかということです。それは「理解」を伴った知識・技能ということを大事にしてください。基本的な問題解決、教科書レベルの問題をしっかりと解けるようになってほしいです。

観点別評価:思考・判断・表現

評価の対象を与えられた知識を活用した、より高度な知識活動を求めたい。応用・発展的な解決と表現。問題解決方略と基礎知識を使った問題解決と回答記述。例えば数学でしたら、回答のプロセスを記述するようになりますし、普段の授業や討論でもそれをきちっと表現出来るようになってほしい。自ら課題を設定し、創造的に解決することを含む。問題を自ら発見したり、設定したりする。分析して、考察を行って、探求する。それを報告したり、発表したりします。こういうことをやってください。高度な要求ですが、これからはそういう力を育てていってほしいのです。

観点別評価:主体的に学習に取り組む態度

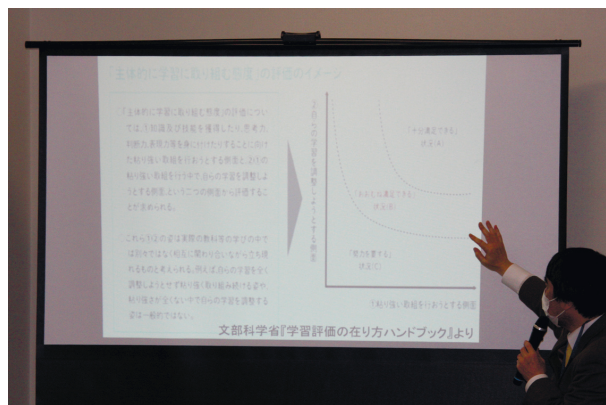
どうことを求めているかというと、自らの学習に積極的に取り組み改善しようとする意思・行動です。生徒もテストや授業でPDCA的なことで回しています。それが上手くいっている生徒とあまり上手くいっていない生徒がいます。その学習のプロセスを改善していかないと学力もついていきません。二つの側面から見ていきましょう。一つは粘り強い取り組みを行おうとする側面。知識・技能や思考・判断・表現に向かう粘り強い努力。例えば、授業では積極的に先生の話の聞いたりノートを取ったり質問したり討論に参加したりという積極的な態度で授業を受けています。家庭学習も含め、自分で計画を立てて自主的に勉強を進めているか。量的な努力と考えるのと分かりやすいと思います。ただ、量だけではない。学習プロセス改善上の工夫をどのくらいしているかということです。自分の学習能力をどのくらい自己診断できているかをメタ認知と言います。学習が苦手な子はそれがもやもやしています。私の研究室で地域の子どもの学習相談を30年ほどやっていますが、小学3年くらいから高校3年くらいまでの生徒が夏休みに研究室にやってきます。一人一人面談をして、家庭教師のように内容を教えます。東工大に来た時から始めた活動です。学力の低い子はメタ認知がよくない。どこが分からないのかが自分で分かっていない。分かっているのか分かっていないのかも、分かっていない。どうしたらいいのか。これは学習方略というものです。どんなやり方でやっていったら出来るようになるだろうか。そのレパートリーがあまりない。それだとやっても出来るようになりません。いろんな方法を知った上で自分の学習をコントロールしていく工夫も見てください。学習計画やワークシートを提出してもらったり、テスト返しレポートも効果があります。テストを返された後にレポートを書きます。人によって差があります。ただ正解を書いてくる人。自分はこういうところをなぜ間違えたのか、自分がしやすいミス、勘違い、問題のポイントに気づけなかったなど分析する人。そういうことまで書いてくると次の学習にも生きてきます。学習のプロセスを見ていく。評価だけではなく、何らかの指導を入れてください。それが自らの学習を調整しようとする側面の観点になります。



学習の自己調整(Self-Regulation)

平たく言えば「学習のPDCAを自分で回すこと」です。目標設定、見通し、計画、遂行、振り返り、内省です。能動的に自らの認知・感情・行動を制御して目標を達成する。学校ではそういう力を育ててほしいです。欧米でもこのような研究はありまして、予見、遂行コントロール、自己省察の3つ。PDCAの前にPlan・Do・Seeというのがありまして、それをとってきたようなものです。メタ認知というのは非常に重視します。モニタリングというのは、学習状況を自分で点検、評価するというものです。それからコントロールです。学習目標・学習方略の変更・修正をして改善を図る。こういうことが学習の自己調整です。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価のイメージです。縦が自らの学習を調整しようとする側面。横が粘り強い取り組みを行おうとする側面。「十分満足出来る」状況だとA、「おおむね満足出来る」状況だとB、「努力を要する」状況だとCです。



教員研修と学習評価計画の例

今、私の学校でやっていることをお話ししたいと思います。今年の3月にやりました。学習評価に関する教員研修。学力の3要素、新学習指導要領、観点別評価の導入。どういう動きがあるのか説明いたしました。どんな評価をするのか、個人メモを10分ぐらい考えて作成してもらって、教科ごとにそれを見せ合ってグループ討論してください。教科ごとに発表してください。個人メモはこういうものです。まず知識・技能や思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度が左にあります。その観点

観点	評価方法	評価項目	評価基準	評価結果
知識・技能	小テスト、パフォーマンス、スピーチ	基礎知識の理解	理解が深い	10
		応用知識の理解	理解が深い	10
		知識の活用	活用が深い	10
		知識の整理	整理が深い	10
思考・判断・表現	小テスト、パフォーマンス、スピーチ	思考力	思考が深い	10
		判断力	判断が深い	10
		表現力	表現が深い	10
		表現力	表現が深い	10
主体的に学習に取り組む態度	小テスト、パフォーマンス、スピーチ	学習意欲	意欲が深い	10
		学習習慣	習慣が深い	10
		学習態度	態度が深い	10
		学習態度	態度が深い	10
各観点のウェイト	小テスト、パフォーマンス、スピーチ	知識・技能	10	10
		思考・判断・表現	10	10
		主体的に学習に取り組む態度	10	10
		主体的に学習に取り組む態度	10	10

ではどういうことを重視したいのか、重視する項目を挙げています。その右にはそれをどんな材料を使って評価するか。小テストやパフォーマンス、スピーチをするなど。主体的に学習に取り組む態度ならテスト返しレポートなど。各観点にどういうウエイトをつけて評定を出すか。それは人によって違いますが、足して10になるようにまず個人で作った上で、グループ討論して全体発表するのですが、個人メモを他の先生の意見も聞いて修正して、評価計画を完成した形にして教科主任に提出してください。教科主任は各教科ごとにまとめを作るようお願いしました。まとめに従ってもらうのではなく、各先生を尊重しますが、他の先生を参考にしてください。これは共有して見られるようになっていきます。今年は中学は始まりました。高校は来年の4月以降に始まりますが、それに向けて準備をしてください。生徒に対してですが、私は大学院生と一緒に行って、いろんな中学・高校に学習法講座をやっています。噛み砕いて心理学の話をしながら、自分の学習改善を考える講座です。先日も高校生に「人間の情報処理と記憶」の話をしました。記憶の話はリクエストが多いです。記憶についての悩みを持っている高校生は多いと思います。記憶が得意な高校生はいないと思います。聞いてみると単

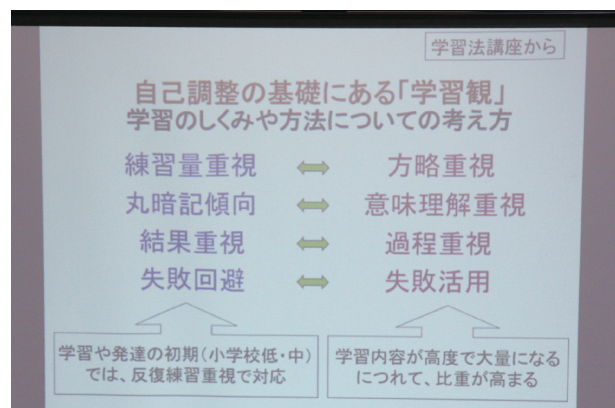
純反復して、やったという自信になっている。私はかわいそうだなと思いました。私は認知心理学という人間の情報処理を研究する分野に基づいた教育心理学の話をして、これはあくまでヒントですという話をします。やるかやらないかは君たち次第です。良さそうだなと思ったら自分に取り入れて、自分の学習方法を確立させてほしいと話しました。感想を書いてもらおうと、この話が響く生徒と響かない生徒もいます。テストの後に何をすることで学力がかなり変わってくる。試合の後に勝ち負けで一喜一憂しているのと、なぜ負けたのか分析して普段の練習に活かすのをやるかやらないかで違ってくるのと同じだということ、分かってくれる生徒もいます。生徒にこういった話をしながら、先生方にも各教科の中で学習方法に関する話を是非入れてくださいと申し上げています。

(参考) 中学・高校 2019年度学習法講座 日程

	中1	中2	中3	高1	高2	高3
学習法イントロ	4.16					
人間の情報処理と記憶		2.17	10.9	6.13	2.21	5.27
理解と説明	6.4	10.21	1.29	2.6	来期	
筋道立てて考える	9.3					
効果的な予習と復習			5.29	9.5		
テストの振り返り			来期	来期	7.20	4.15
学習意欲の心理学				来期	来期	7.1

自己調整の基礎にある「学習観」

学習のしくみや方法についての考え方。これは生徒一人一人も持っているはず。人生観、世界観というように、学習とはどんなものだ、だからどんなやり方でやるとうまくいくという考えを持っているはず。自分の学習観を見つめ直してみましょう。練習量に比例して学力がつくと思っている生徒もいれば、同じ時間でもどういう攻略でやるか考えたい生徒もいます。丸暗記するのが勉強だと思っている生徒もいれば、なぜそのやり方で答えが出るのか理解を重視する生徒もいます。結果重視と過程重視ですが、テストが返ってくると点数ばかり気にして合ってるか間違っているかばかりを気にする生徒もいれば、どこを間違えたのか、なぜできなかったのかプロセスが大事という生徒もいます。高校生になればいい点を取ることもあれば悪い点を取ることもあります。必ず失敗があるのですが、それに自信を無くしてやる気を無くしてしまいます。失敗をしたくないのか、失敗は成功の基なので、なぜ失敗したか考えて普段の学習に活かせば次はできるようになるという姿勢をもっているか。小学校の低中学年では上記のような反復練習重視の考え方でなんとか対応出来ています。高学年になると量が増えてくるとそれでは頭に入らなくなってきます。例えば漢字ならへんとつくりがあるという知識があると、丸暗記するよりはずっと覚えやすくなるし、応用も利きます。反復は大事ですが、それだけではなく工夫をいれる。教科ごとにどんな工夫があるか、講座の中で話していきます。



指導と評価の一体化

指導と評価が一体となったサイクルにしましょうということです。指導はするけど評価はしない、これはまずいのです。評価されないならやらないということになってしまいます。逆に評価することを指導しない、学習態度など評価するが、どうやったら改善されるのか指導しないのはまずい。目標にそって指導し、指導した

ことを評価する。指導内容と評価内容の齟齬がないようにしましょう。形成的評価という言葉も今回よく使われていますが、評価というと指導の最後に一括して成績をつけるだけ。学習プロセスにおいて評価し、指導を調整していきましょう。途中でつまづきを克服して、高い習得に至るようにしましょう。途中に評価をこまめにして、最終的に高いパフォーマンスにする。途中にする評価を形成的評価と言います。最後に一括してする評価を総括的評価と言います。このことを今回の指導と評価ということで留意して下さい。

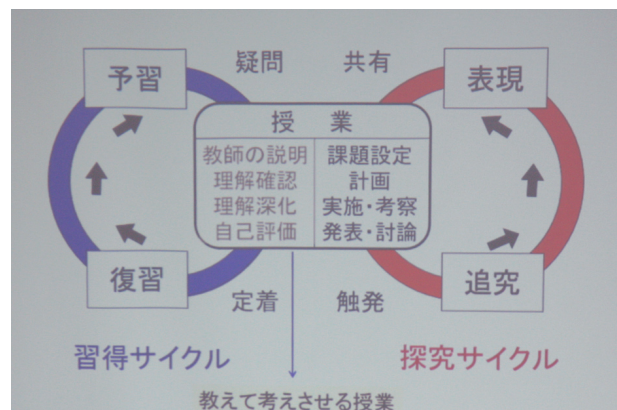
具体的にどのような授業をするのか

習得と探求を分けてメリハリをつけることは大事です。こういうことを知識・技能として身につけてほしい。普段は習得の授業が多いと思います。そこでもアクティブ・ラーニング的なことは起こり得ます。生徒自身による説明活動、学び合い、教え合い、協働的問題解決。「教えて考えさせる授業」の理解確認や理解深化も習得の授業の中に入れていきます。探求的な授業では生徒自身による課題の発見・設定、計画、実施、協同的な探求活動、表現活動もそこに入っています。習得と違うのは、生徒自身が課題を設定しているということです。習得は習得目標というのがあり、先生側が授業でこういう力や知識をつけてほしいということで課題は先生が決めます。探求的な授業では生徒自身が自分の興味関心に基づいて課題を決めます。これは総合的学習の時間で行われました。ThinkQuestは中高生が自分が興味を持った課題をホームページにまとめる世界的コンテストです。英語版で、入選したものは世界中で子どもたちの教材として使われます。Researcher-Like Activityは私がつけた名前です。研究者のように自分で課題を設定します。後で紹介するのは数学ですが、自分で課題を設定し、問題を作って、回答も作り、ポスターにして学会のポスター会場に貼って発表。参加者とディスカッションするという授業です。

「教えて考えさせる授業」とは

日本の教育というのは一方では詰め込み教え込みと言われている授業があります。一方では1990年代から教えずに考えさせる授業というのが出てきて、教師が教えるのではなく子どもに気づかせる、発見させる。課題を与えたら子どもたちにみんなで考えていきましょう、という訳です。私はこれはまずいなと思いました。それをする学力がある子にとっても、ない子にとっても破綻していったと思います。先生は子どもに思考力、表現力をつけるとよかれと思ってやって、ついていけない子が出てきます。そういう子は学習相談に来ます。先生が教えてくれないから分からないんです、と言うんです。何を言ってるのだらうと思いました。問題を与えたら後は教えてくれない、授業で何をやったかつかめないまま、授業に出るたびに分からないことが溜っていくと言います。基礎的なことは学力が低い子を念頭に置いて分かりやすく丁寧に教えましょう。そこである程度基礎知識を共有した上で、塾に行っている子にとってもやりがいのある課題を用意して深い習得を促す。そこにアクティブ・ラーニングを入れるということです。一人では難しいけれども相談し合って考えていく。

高校物理の落体運動。空気のある中では重いもの程速く落ちる。真空なら重い物も軽い物も同じ速度で落ち



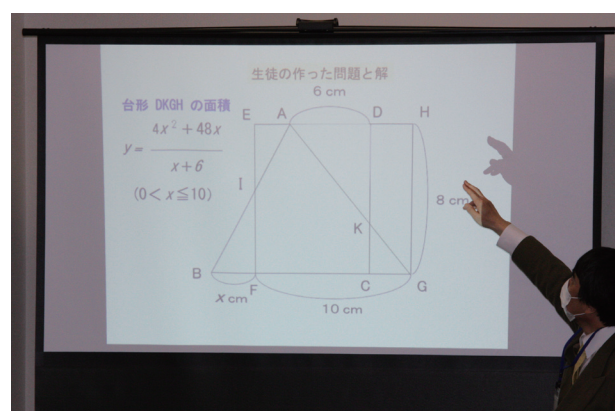
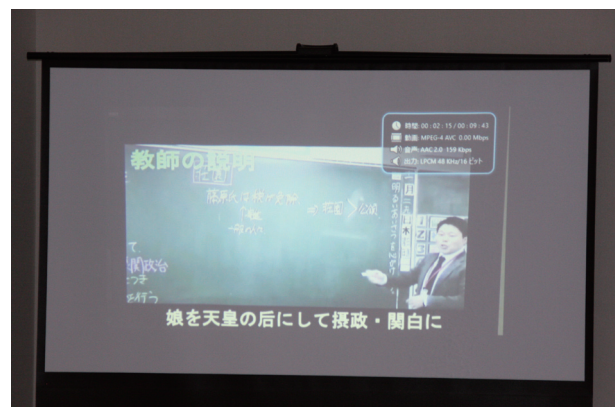
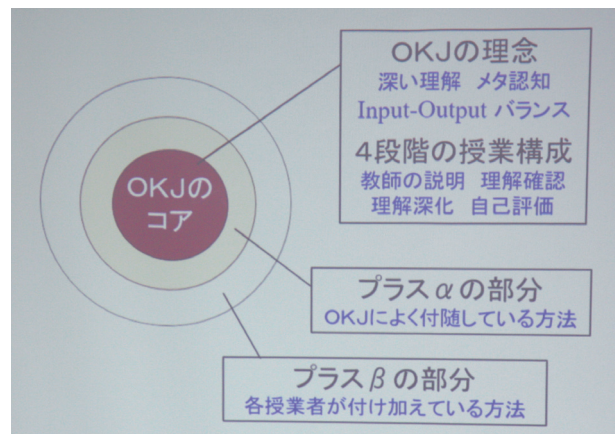
る。理解深化課題としては空気中ではどうだろう。ピンポン玉の一つは中空、一つは中に金属を詰めたもの。この二つを一緒に落としたらどうだろう。空気中だから空気抵抗があるだろう。空気抵抗は速さに比例する。理系の高校2年の生徒でしたが意見が割れます。中に金属を詰めたものが若干速く落ちました。重い物が速く落ちるが、重い玉と軽い玉が時間とともに速さがどう変化していくのだろうか。これをグループでグラフを作っていきます。物理ではこれをVTグラフと言います。縦軸V速さ、横軸T落とし始めてからの時間、このグラフを書いてみましょう。4人ずつくらいグループで相談しながらグラフを作っていました。

もう一つお見せしますが、社会科の授業で埼玉県先生なのですが中1です。どんな様子か見てください。これは藤原氏摂関政治のところ。先生は始めにきちんと教えるというところがポイントです。アクティブ・ラーニングだからと言って、いきなり議論させたり共同学習するのではなく、教えるべきことは教えた上で教わったことが説明出来るくらい分かっているか、これが理解確認です。その次に理解深化という課題です。ここでグループになって調べて考えをまとめる。歴史上の人物になったつもりで、時代の様子やその時の気持ちを伝えるストーリーテリングという活動を最後に入れていきます。このグループで練習して、最後に発表します。教えることと活動することを組み合わせた授業が教えて考えさせる授業の典型だと思います。子どもたちの声が出ている授業は珍しいと思います。コンパクトな教師の説明でも浸透します。理解しているかどうか、自分の言葉で表現出来るよう求めます。さらに深く考えるような課題を出します。アクティブ・ラーニングを入れていき、全員が参加出来るような授業を目指すということです。

考えさせる授業をOKJと言いますが、OKJの理念として深い理解、メタ認知、Input-Output、バランスを目指す。そのために4段階の授業構成をしています。OKJに付随している方法というのは予習を入れることもあります。教科書は予習でも復習でも活用する。各授業者が付け加えている方法はその通りやる必要はありません。それぞれ工夫して入れて下さい。

最後に探求の話をしてします。問題づくりとポスターセッション。ひとりひとり解いている課題は自分で設定したものです。

(探求学習の例の紹介がありました。)



図書・文献紹介

- 『開かれた学びへの出発』(市川伸一著 金子書房 1998)
『学ぶ意欲とスキルを育てる』(市川伸一著 小学館 2004)
『「教えて考えさせる授業」を創る』(市川伸一著 図書文化 2008)
『教えて考えさせる授業 中学校』(市川伸一著 図書文化 2012)
『教えて考えさせる算数・数学』(市川伸一著 図書文化 2015)
『授業からの学校改革』(市川伸一著 図書文化 2017)
『速解 新指導要録と「資質・能力」を育む評価』(市川伸一編 ぎょうせい 2019)
『教職研修』(教育開発研究所 2020.6月号特集:新学習指導要領下の学習評価・テストはどうあるべきか)
『「教えて考えさせる授業」を創る アドバンス編』(図書文化 2020)

紹介リソース ビデオ等

- 『学力と学習支援の心理学』放送大学アーカイブス(全15回)
第6回:全体的解説・算数、第9回:理科、第10回:社会、第11回:英語、第12回:事後検討会(三面騷議法)
『教育政策と学校の組織的対応』放送大学教員免許更新講習
第2回:新学習指導要領と教育課程実施状況(市川)
授業ビデオの貸し出し(公的教育機関のみ 2ヶ月間)
1.かけ算九九の問題づくり(小2算数) 2.4桁のひっ算(小3算数) 3.円の面積(小6算数)
4.方程式とグラフ(中2数学) 5.因数分解の応用(中3数学) 6.大造じいさんとガン(小5国語)
7.藤原氏の摂関政治(中1社会) 8.物体の自由落下(高2物理) 9.合唱(小5音楽)
10.When is your birthday?(小6英語)

質疑応答

進 行 3D教育研究会 副会長 樋口 元先生(京華商業高等学校 校長)

Q 評価をつけないことを論議され、それを反対したのが現場だったということですが、私が思うに現場の先生というのは最初に評価を考えて、それから観点を考えるのかなと思います。観点を先につけてから評価をつけるという周知はされているのでしょうか？

A 私たちにしてみれば、先に評価をつけてから観点をつけるというのは想定外でした。観点をつけて評価して総合点をつける、というのを想定していました。趣旨から言うと、まず細かく観点を見るのが優先だということです。それは生徒にもフィードバックしてほしいです。

Q 私もそう思っていて本校で先生方に言ったのですが、観点を先につけるなんてできないと言う話になりました。各教科から観点のどこを見ていくかということを出していく必要があると思います。私はそれを前もって生徒に出さなければいけないと言ったんです。評価の基準をどこまでできたらAなのかどこまでできたらBなのかというのをルーブリック化しないといけないのかなと思います。どの辺まで周知して、どの辺までやるのかお聞きしたいです。

A まず何に基づいて評価をするのか。評価の材料を評価される側の生徒にも最初からちゃんと伝えるのは大事なことだと思います。生徒にしてみると何で評価されているのかわからない、という状況はまずいです。評価の基準を生徒に伝えてほしい。「規準」はどういう次元で評価するのか。「基準」は段階を分けるレベル分けです。基準を全国的に統一すべきだというご意見もありましたが、止めました。レベルが高い学校は全員がA、レベルが低い学校は全員がCになって評価の意味がありません。評価は日々の学習改善に活かすものであれば、それは学校の中で考えていただければいいのです。

Q 本校は高校生も始めています。評価が大幅に上がってしまいました。観点から評価をつけると上がってしまい、評価平均が高めに出てしまいました。今までの既存の評価を新しい観点別評価につけると変わってしまうのか、変わっていいのか、元に戻さなければいけないのか、お聞きしたいです。



A もともと学校によって評価の基準は違うので、それぞれの学校でどういう評価の基準にすれば生徒に頑張りがいがあるか考えてもらえばいいと思います。1、2学期は観点別だけを出して、学年末には1～5の評定を出すというのを普通にやっているんで、観点別が先だということが前提になっています。観点別が基本で、そこに何らかのウエイトをつけて学年最後に評定をつけるというのを想定しています。結果的にこれまでと比べて高めになったり低めになったりすることはあると思います。

Q 私は教師ではなく、一般企業からの参加です。教員研修の学習評価計画の例のところであったのですが、教科主任のまとめと全教員の評価計画を共有というところで、教科ごとのまとめを教科主任が作成、互いに参考にするが統一しないというのは、固定概念的に囚われないとか、自由な発想を促すためにそうするということなのですか？会社の方針はシンプルに全部の評定を統一の見解でまとめていって、評定を決めるというやり方だったので、これから入ってくる新入社員や若手を育てるのに逆行すると思います。そここのところの真意を聞かせてください。

A 教科ごとに一本化してくださいと言うと抵抗が出ると思いました。まだ0の状態から始めているので、今は統一しないということです。

Q 観点の中で主体的に学習に取り組む態度というものをどう評価したらいいのか見当が付きません。「知識・技能」や「思考・判断・表現」に関しての評価はこういったかたちで評価出来るのではないかとか、試験において設問ごとに問える観点はこうだと設定することによってそこは問えるのか、という風にも思うんです。やってる例があれば教えていただきたいのですが。

A 個別学習相談をやっていて、一人一人に学習の分からないところを教える中で学習法も折り込んでいきます。この子は自らの学習を調整しようとする側面が弱いなど、気づきます。このままではなかなかできるようにならないだろう。授業に対してメモを残している生徒もいれば何も書いていない生徒もいる。頭に入っていてノートを取っていないのであればいいのですが、そうでなければ主体的に学習に取り組んでいるようには見えません。テスト返しレポートでもただマルバツつけて正解を書く生徒もいれば、間違っって悔しいと書き込む生徒もいます。それは工夫や努力の表れです。それを評価する。普段の授業でも今日は〇〇くん、熱心だったとか、分からないけれどたくさん質問をしてきたなど。それをメモして、学期末に見返してプラス評価をします。それを積み重ねていって、主体的に学習に取り組んでいるかの評価にしています。

授業をやっている中でひとりひとりにそういう評価をつけるのは確かに大変です。普通はBなのですから、とりわけよければA。とりわけちょっとまず



いなというのはC。くらいに考えればそれぞれにつけることができるのではないのでしょうか。

Q 知識・技能がAで学びに向かう力がCという生徒がいます。それはCをつけていいのか、中学で混乱しているのはそこではないかと思います。私なんかは、Bくらいでいいのではないかと思います。

A 連携させながら見てくださいと言います。ノートを取らない生徒がいて、その子が成績がいいとすると、ノートを取らなくても頭に入っているか、知っていたか。それはノートを取らなくてもいいけれど、同じノートを取らないでも知識・知能もCだとまずい行動です。ひとつの行動を見るのではなく、関連させてその子の学習行動を評価すればいいのです。



Q 学力の3要素の編成が複雑化していて、細分化して、現場の教員からすると見るべきところが増えて大変になっているように感じています。市川先生のご意見、今後の展望をどうお考えなのかお聞きしたいのですが。

A 知識・知能をとってみても、込められている意味が複雑化しているような気がします。生きて働く知識と違うのではないのでしょうか。知識は持っていることを評価するのではなくて、知識がベースにあるからできているという側面を大事にしましょう。どれだけ理解しているか、持っている知識を説明できるか。学校の先生は授業で台本も見ずに説明しています。これは分かっている人の姿です。社会に出たら説明できるかを求められます。クイズや面接では例えば、参勤交代制です、という正解が求められるかもしれないが、社会に出たら、参勤交代制とはどういうものか、なぜそういう仕組みが出来たのか、その結果どういうことが起こったのかということを説明することが求められます。何を何というか、ではなく何々はどういうことなのかを説明するのが大事になります。学校で大事なことを丁寧に見ていこうと時代が変わってきたので、そういうこともやっていこうという動きだと私は思っています。

Q 我々の思うメタ認知をもって生徒に学習に取り組んでほしいのですが、どういう風に方向付けをしてそういう感覚を持たせればいいのでしょうか。

A 生徒がどの教科にウエイトを置くのかは生徒自身が判断せざるを得ないことです。生徒自身が客観的に自分を見てレベルが低いと知らないとメタ認知が育ちません。それを気づかせる仕組みを入れた方がいいです。他の生徒の様子を見て自分もっと頑張ろうとか。先生が自分はA評価だと思ったけどB評価しかくれなかった、なぜBか聞いてくることはいいことで、説明してAの生徒のものを見せたら自分のと全然違う。こういうことを書いていれば評価すると言うと、納得して次からはそういうことを頑張ろうと

思います。そういうやりとりが大事です。評価をつけっぱなしにしないでなぜそうなのかという説明をして、本人に納得してもらって良くなる手だてが本人にも見えてくるようにそれが指導と評価の観点です。

最後にですが、ここに書いたことと小中に出している広報誌で述べていることと、文科省の国立教育研究所が述べていることが若干違うことがあります。授業をいかにまじめに受けるか、授業だけで考えているところがあります。私の方は予習、授業、復習のサイクル全体の中で自分の学習を組み立てていく、これは学習の自己調整だという言い方をします。どちらがいいかは学校の先生が最終的に決めてくださればいいと思います。

参加者全員での記念撮影



出来る・大丈夫・大成功

3D教育研究会

2021.10.16 第27回 3D教育研究会 in 朋優学院高等学校

株式会社K A教育

〒173-0012

東京都板橋区大和町12-12

03 - 6784 - 7675